

KATARRIBE 震災の教訓世界へ

南三陸でシンポ

中高生が語り合った。多賀城高3年の川名啓介さん(18)は震災遺構の意義につ

いて「もの言わぬ語り部で、外国の人にもわかりやすく伝えられる。見て悲しい気持ちになるからこそ、次世代に伝えていけるのでは」と話した。(川野由起)

災害の教訓を世界に向けて語り継ぐために話し合う「全国被災地語り部シンポジウム」が24日、南三陸町の南三陸ホテル観洋であった。東日本大震災から9年近くが過ぎ、東北の語り部活動を世界で通用する「KATARRIBE」として後世に伝えようと、参加者らは訴えた。

今回で5回目で、兵庫県淡路市や熊本市でも開かれ



分科会で話し合う中高生ら＝南三陸町

てきた。震災時に国土交通省東北地方整備局長だった徳山日出男・政策研究大学院大学客員教授が基調講演し、生存や救助の教訓を伝える展示に力を入れているハワイ島の太平洋津波博物館の事例を紹介した。教訓・伝承は鎮魂・慰霊と同様に大切とした上で、「東北の人にとって、世界を救える教訓を伝えることが恩返しになる」と話した。

語り部の意義や未来について語るパネルディスカッションでは、約420人が耳を傾けた。東北の被災者に密着した映画「一陽来復」の尹美亜監督(45)は「(語り部には)同じ思いをしてほしくないという愛があるから、話が胸に響く。数字や事実関係は忘れてしまうけれど、感情は忘れない」と訴えた。

分科会では、語り部活動をしたたり災害を学んだりす